

平成 20 年度病害虫発生予察特殊報第 2 号

平成 20 年 12 月 4 日
鳥取県病害虫防除所

- 1 病害虫名 アイリスイエロースポットウイルス (I Y S V) による病害
- 2 病原 アイリスイエロースポットウイルス
(*Iris yellow spot virus* : I Y S V)
- 3 発生作物 ラッキョウ
- 4 発生地域 県中部

5 発生確認の経過

平成 20 年 11 月、県中部のラッキョウほ場で、葉に白い斑紋が生じ葉先が枯れる症状が発生した。症状は灰色かび病菌による白斑症状に酷似していたが、ネギアザミウマの寄生が多数認められた。鳥取県農林総合研究所園芸試験場において、D A S - E L I S A 法及び R T - P C R 法によるウイルス検定を実施したところ、罹病葉から I Y S V が検出され、本県では未発生の I Y S V による病害であることが判明した。

I Y S V による病害は、国内では平成 8 年に千葉県のアルストロメリアで初めて発生が確認された。以後、18 都県で特殊報が発表されており、トルコギキョウ、タマネギ、ネギ、ニラなどで被害が報告されている。

6 病徴

本ウイルスによるラッキョウでの病徴は、葉身に紡錘形の白色斑紋を生じ、後にこれが拡大してえそ条斑となり、病斑部より先が枯れ込む場合もある(写真 1、2)。ラッキョウ灰色かび病の白斑症状と酷似しているため、注意が必要である。

7 病原ウイルスの特徴

(1) 伝搬方法

本ウイルスは、トスポウイルス属に属し、ネギアザミウマにより伝搬される。同じトスポウイルス属であるインパチエンスネクロティックスポットウイルス (I N S V) や トマト黄化えそウイルス (T S W V) を媒介するミカンキイロアザミウマは、本ウイルスを媒介しないとされている。ネギアザミウマは、幼虫時に感染植物を吸汁することによって本ウイルスを獲得し、終生伝搬能力を保持するが、経卵伝染はしない。本ウイルスは種子伝染、土壌伝染はせず、管理作業による汁液伝染の可能性は低いとされている。

ラッキョウにおける罹病株の鱗茎を介した種球伝染の有無は不明である。

(2) 宿主範囲

現在までに 18 科 40 種以上の植物で感染が報告されている(表 1)。

8 ネギアザミウマの生態

世界中に分布し、日本においても普遍的に分布する。体長は1.1 ~ 1.6 mm。体色は黄色から褐色。一般に夏期は淡色系、冬期は暗色系である。本種の発育は非常に早く、産卵された卵は20℃では20日、25℃では16 ~ 17日で成虫となる。主として成虫で越冬し、5月以降に増加する。年に10回以上世代を繰り返し、高温少雨の気象条件で多発生となる。

9 防除対策

- (1) 媒介虫となるネギアザミウマの発生動向を把握し、発生初期からの防除に努める。
- (2) 雑草はネギアザミウマの発生源となる可能性があるため、ほ場内外の除草に努める。



写真1 ラッキョウの病徴



写真2 紡錘形の白色斑紋症状



写真3 媒介虫のネギアザミウマ

表1 IYSVの感染が報告されている植物

科名	植物名
リンドウ科	トルコギキョウ
ユリ科	ネギ、タマネギ、ニラ、ラッキョウ、ニンニク、テッポウユリ、リーキ、ブルビネ、ジャノヒゲ、オオバジャノヒゲ
アルストロメリア科	アルストロメリア
ヒガンバナ科	アマリリス、ユーチャリス、クンシラン
アヤメ科	ダッチアイリス
ヒユ科	センニチコウ
アカザ科	ハウレンソウ
アブラナ科	ダイコン、ハクサイ、ブロッコリー、ミズナ、イヌガラシ、スカシタゴボウ、タネツケバナ、ナズナ
セリ科	ニンジン
カタバミ科	カタバミ
キク科	チチコグサモドキ、ノボロギク
ゴマノハグサ科	オオイヌノフグリ、トキワハゼ
シソ科	ホトケノザ
スベリヒユ科	スベリヒユ
スミレ科	パンジー
ナデシコ科	コハコベ、オランダミミナグサ、ノミノフスマ
ヒガンバナ科	スイセン
マメ科	ヤハズエンドウ

表2 ラッキョウにおける主な防除薬剤（平成20年12月4日現在）

薬剤名	対象病害虫名	希釈倍数	使用時期	使用回数
ボタニガードES	アザミウマ類	500～1000倍	発生初期	-
ビリーブ水和剤	ネギアザミウマ	1500倍	収穫14日前まで	3回以内
アグロスリン乳剤	ネギアザミウマ	2000倍	収穫3日前まで	5回以内
スピノエース顆粒水和剤	アザミウマ類	2500倍	収穫3日前まで	3回以内
モスピラン水溶剤	ネギアザミウマ	2000倍	収穫14日前まで	3回以内
アルバリン顆粒水溶剤	ネギアザミウマ	2000倍	収穫前日まで	3回以内
スタークル顆粒水溶剤				

野菜類で登録